

福井モデル

—未来は地方から始まる—

藤吉雅春著 (文藝春秋, 2015年4月, 1,300円+税)

Book Review

FUJIYOSHI, Masaharu: FUKUI MODEL

茂木信太郎*

MOGI, Shintaro

1. ボローニャ紀行

井上ひさしが、イタリアのボローニャに取材旅行した時の紀行文に、同市の産業博物館を訪れて大そう驚いたという件がある。

その産業博物館は19世紀中葉に設立されたイタリア最古の工業専門学校の付属施設であるが、まずはその街並みの精巧な立体模型の展示の紹介がある。その立体模型は、ボタンを押すたびに、地下1階の、次には地下2階の都市構造が出現するというのである。

かつて世界一の絹の産地だったころ、一般家屋は2階、3階とぶち抜いて紡績機が稼働し、そして、地下1階も小さな紡績工場になっているという姿が、からくり機械のように出現する。そのミニチュアの家屋のなかにある、さらにミニチュアの精巧な紡績機械が糸を見る見る紡いでいくのだそうである。地下2階は、まるで運河の網の目のようになっていて、レノ川の水を引いて得た動力

が各家にまわる様子と、その水路が交易の要衝であるヴェネツィアに繋がる運搬路に導かれるという仕掛けが、文字通り手に取るように分かったのだという。

続いて彼は、IMA社でヒアリングした話を紹介する。IMA社は、ティーバックと薬品の充填包装機械で世界一の会社とのことである。同社は、日本茶の自動ティーバック包装システムも伊藤園からの注文で出荷しているそうである。

このIMA社は、1924年に設立されたACMAという包装機械会社から包装機械作りのノウハウを持ち出して、いわば暖簾分けをしてスピントフした会社とのことであり、そのような包装機械会社はIMA社を含め50社超ほどもあるという。オカモトのコンドームの包装機械もここから出荷されている。そしてこの50の包装機械企業の周囲には、その部品を供給する300社ほどが取り巻いているという。つまり、ここは世界に冠たる「パッケージングバレー」(包装機械メーカーの産業集積地)なのである。

井上が目にするのは、これら包装機械メーカー

*本大学経営学部教授

の従業員がいわばノウハウ持ち出し自由で起業できるということである。その場合の唯一のルールは、同じ分野の包装材を手掛けないということである。こうして1つの分野はそれの得意企業がいっそうの深堀りをし、また併せて「パッケージングバレー」全体としては新しい分野の開拓が推進されるという次第である。では、ルール違反は起こらないのかというと、決して起こらないのだそうである。その場合は部品メーカーが取り合わないで、「バレー」の住民として排斥されてしまうことになり、そっくり真似業は、不可能なのである。

井上は、同市の歴史や社会を学んで、その地域社会の協同組合性と自治性という本質を辿ろうとする。筆者（茂木）は、この井上の紀行記を藤吉雅春『福井モデル』（2015、文藝春秋）から教えていただいた。

2. 「消滅可能都市」に抗えない「地方再生」

藤吉雅春『福井モデル』は、書籍のタイトルこそ「福井」と冠されているが、実は、「石川」「富山」「福井」の北陸3県がテーマである。

同著で思い出したが、ひところ官制データながら「豊かさ指標（新国民生活指標）」という都道府県別の比較数値が話題になっていた頃があるが、この指標はいつの頃からか話題となくなってしまう。それには理由があった。同指標は、1999年に6年連続で最下位となった埼玉県の当時の土屋義彦知事の抗議で、この年で廃止となっていたようだ。指標そのものが作成されなくなって十数年も経っているのだから、話題にもしようがないということであるが。

ただ、指標そのものは客観的なデータを寄せ集めて集計したものであるから、それなりに相互比較や経年比較するには都合が良かったはずである。

実際、「住む」「働く」「遊ぶ」「費やす」「育てる」「学ぶ」「交わる」という8分野159項目のデータを用いていたというから、いろいろな意味で役に立っていたと思われる。“粹”の反対は“野暮”だと思うが、こうして“野暮”な政治家として名前が何時までも残るのも、どうかと思う。翌年には、順位変動があったかも知れないのに。

それはともかくとして、筆者の靡げな記憶ながら、北陸各県は同指標で常に上位に位置していたことを思い出す。

そして、久々にこのような指標を思い出すのは、民間（日本生産性本部）の「国民創成会議」の「人口減少問題検討分科会」が2014年に「消滅可能都市」（20歳代から30歳代の女性人口が2010年から2040年にかけて半減する市町村）という予測を発表し、その中に東京都「豊島区」が「消滅組」に入っていたために、マスコミなどでも大騒動となったからである。もっとも、同区をはじめこのレポートで名指しされた少なくない「消滅組」自治体では、真剣にこの指標を受け止め、早速に住民参加型の対策専門会議などを設置してその分析や対策に取り組んでいるのであるから、警鐘効果はそれなりにあったというべきであろう。

著者藤吉雅春は、こうした典型的な話題だけではなく、ここに至るまでの4半世紀前からの同様のテーマに関する政府関係者の先駆的な情報発信者への取材経験を有しているので、こうした話題を縦糸にして、今日までの政府諸政策やマスコミの報じ方などが悉くの外れに終始してきたという事実を分かりやすく客観的な資料などで総括している。

また、それとは対照に、諸外国・諸都市の効果的な事例などを横糸として織り込み、アメリカ・ニューオーリンズ、オレゴン州ポートランド、コロラド州リトルトン、イギリス・ロンドン、そして上述したイタリア・ポローニャなどの具体的な事例をさりげなく紹介しつつ、これまでのわが国

に蔓延していた発想や思い込みや無駄な政策論議を捨て去って、虚心で、北陸3県の実態とその変化とを直視しようという眼差しを読者に植え付けていく。ノンフィクションライターとしての冴えた筆運びである。

3. 富山モデル

本書『福井モデル』が、主に事例紹介として取り上げているのは、実は、富山県「富山市」と港町・岩瀬、そして福井県「鯖江市」である。

著者藤吉は、まず富山市長森雅志が、ニューヨーク国連、パリ、北欧、南米、韓国、イタリア、カナリア諸島など海外を含め、毎年65～79回の講演や討論会に招待されていることを紹介している。富山市長が世界を駆けまわるのは、同市が日本で初めて国連「エネルギー効率改善都市」に選定されたことであるとか、OECD『コンパクトシティ政策報告書』（2012年）で、メルボルン、バンクーバー、パリ、ポートランドと並んで、富山が世界先進5都市とされ、しかも、その中で人口減少と少子化・超高齢化のなかにあるのは富山市だけだという明快な理由を述べている。筆者（茂木）を含めて、誰がこのことを知っていただろうか。

いや、国内外から同市への行政視察が増え続けており、2010年以降は毎年400団体以上、12年には4877人が視察に訪れているというのであるから、知らないでいるのは筆者の周辺だけかもしれない。あるいはマレーシア・ジョホール州では、ジャングルを切り開いて富山モデルの都市建設さえ行われるという。

具体例は、同書に詳述されているが、同市はそれまでの行政手法から推すとえば奇手奇策を間断なく繰り出し、「コンパクトシティ」構想の下に描かれた計画に沿って人口の地理的な再配置を進めた。人口の地理的な再配置とは、別の言い方

をすれば、住民がそれまで住みなれていたところから他所に引っ越し転居することである。そして、2363戸の計画目的エリア内移転を実現させた。また計画された公共交通エリア内人口を1万7736人増加させた。

あるいは、個人所有の山小屋に補助金を出してトイレをバイオトイレにして、“山ガール”の訪「富山市」人口を一挙に増やした（もちろん市議会では個人宅トイレに税金投入してよいのかという反論はあったが）。

あるいは、「ライトレール」（軽量軌道交通・2両編成の小型電車）を市街地に敷いて、外国人客には無料とした。毎年4月は、立山の室堂で「雪の大谷ウォーク」があるため富山市内の外国人宿泊客のピーク月である。これが2011年には148人であったものが、無料化で3年後の14年には9739人となった。さらに指定の花屋で花束を買って「ライトレール」に乗れば、誰でも運賃無料とした。「花トラムモデル事業」というのだそうだ。市民にはあまり受けなかったそうであるが、これを伝え聞いたある企業の女性役員が市長を訪ねて、支店の設置を通知した。「こんな町で社員を働かせたい」という理由だった。

4. 鯖江モデル

日本で最も社長が多い県は福井県で、人口1万人当たり社長数は1599人だそうだ。単純に均すと人口6人に1人。乳幼児や寝たきり高齢者や公務員を除いた人口ではいったい何人に1人になるのだろうか。中小零細企業が多いともいえるが、ともかく眼鏡、繊維、漆器の産業集積で、社長輩出に貢献しているのが鯖江市である。

鯖江市は、眼鏡フレームの国内シェア96%、世界シェア約20%だそうである。フランスのシャイロ（レイバン、ルイヴィトン、フェンディなどの

ブランドライセンスを持つ)からの発注も少ないようである。

眼鏡は、金型、研磨、子ねじなど、200もの作業工程が、会社から会社へと分業作業で流れている。ブランド品を扱っているから、外部に対しては秘密主義だが、会社間では相互依存だ。先述したポーロニヤの地域社会協同組合と相似形システムである。

藤吉は、鯖江の眼鏡産業の発生の秘密を紐解いていく。明治の末期に近い頃いわゆる篤農家である、増永という豪農が大阪から眼鏡職人をスカウトして鯖江に連れ帰った。近隣の農家や大工を集めて講習会に明け暮れ、眼鏡フレームを作れるようになった。次に、名工を招聘して本格的な技術の習得と生産を開始した。3年後には見事な品質を誇るようになった。ここで、増永は、1期生を独立させて請負制とし、各自がそれぞれ技術者を育成していくという起業支援政策を採用して、地域全体としての供給力を効果的に増やしていくという手法を採った。経営史というところの間屋制手工業の一種といえるかも知れない。ただ、鯖江という地域のなかで、「カネ、知恵、人、技術が、ぐるぐると生態系」を回り育っていくという次第となる。

5. 拠点は地方にあり

藤吉は、さらに「高橋尚子モデル」と呼ばれる「ダブルラッセルメッシュ」という素材メーカーを紹介する。広義には繊維産業に属するのであるが、この繊維手法素材を用いたシューズを開発し、シドニーオリンピックで、その威力を全世界のトッププレーヤーの目に焼き付けた。続くアテ

ネでは野口みずきがダメ押しをして、2回連続の金メダルを齎した。

「北陸三県繊維産業クラスター」には、中小の200数十社が参加して、研究開発、人材育成、販路拡大、雇用創出を目指しているという。

藤吉の結論とするところは、教育である。「自発学習」とも言い換えられているが、地域社会のありようが教育環境そのものとして機能しているところに、次世代が次々に新しい発想を具体化していく下地を見つけている。

20世紀モデルではない社会事業の拠点が地方にあるということを雄弁に教授してくれる功著である。

<参考文献>

- 井上ひさし『ポーロニヤ紀行』2008年、文藝春秋(2010年、文春文庫)*。
- 泉谷渉『100年企業、だけど最先端、しかも世界一』2007年、亜紀書房*。
- デビット・アトキンソン『新・観光立国論』2015年、東洋経済新報社。
- 相川俊英『奇跡の村』2015年、集英社新書。
- 高城剛『人口18万の街がなぜ美食世界一になれたのか』2012年、祥伝社文庫。
- 「おらが村のインバウンド」特集、『日経ビジネス』2015年11月30日号、日経BP社。

評者付記(茂木)

本稿は、もともと一般社団法人ソーシャルプロダクツ普及推進協会(略称 APSP・東京都港区)事務局より、私が同会の事業(運動)に関連する図書の紹介をして欲しいと依頼され、2015年8月に選書し寄稿したものである。その後、同会で関係者にメール配信される会報「ニューズレター」31号(2015年8月26日)に掲載されたが、配信範囲は限定的であるため、同会の了解の下に、本誌へ採録することとした。その際、幾分か補筆を施したので、上掲稿とは若干の異同があることを了解されたい。また、当初稿にはなかった数点の参考文献の紹介を補った(対象図書にも19点の参考文献一覧があるが、それとは一部のみ重複し(*印)、他は茂木の掲示である)。